



図12 コスチョンキ1遺跡・住居コンプレックス2の発掘風景と出土した石製女性像  
(筆者撮影)

長径およそ 35m、短径 15～16m の 1 号コンプレックスは、当初、巨大なロングハウスと想定されたことでよく知られている。床面をいくらか高くした敷地に半地下式の堅穴遺構が周囲を楕円形にめぐり、9つの炉がおよそ中心軸に沿って並ぶ様子から想定復原されたものであるが、瓜二つとも言える同じような構造物が隣接して存在していたことが、その後の調査で突き止められている。それぞれが、上屋でつながる 2 軒の住居（ロングハウス、大型共同体家屋）とみなす考えに少々無理はあるが、中央の炉、広場を中心に小さなマンモス骨格製住居、あるいは貯蔵穴などが周囲に配置される複合的施設として、およそ同じ時期に、共通の構想をもって設営、経営されていたものであることは間違いなからう。

図の左の 2 号住居コンプレックスの場合、ロシア文字の A～I が半地下式住居と推定されている。関連して、住居コンプレックス内の堅穴、炉、生活面から集められた炭や骨をもとに、数多くの放射性炭素による年代測定が行われ、19,500～24,000 年前の各種の年代が報告されている。